

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第127号 2025年7月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 鹿児島大学構内にある「亡友記念碑」及び「頌徳之碑」の 来歴	杉山 大幹	2
大東文化大学体育連合会『スポーツ大東』創刊号に寄せて － 理事長南條徳男と教養部長村田克巳からの祝辞 －	谷本 宗生	10
大正時代の女子高等教育(76) 金城女子専門学校(6) － 中等教員無試験検定資格をめざして	長本 裕子	14
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(16): 『最新式入学案内』(大正6年)	吉野 剛弘	21
資料から見る「教育」の歴史⑤ － 『東京工業大学百年史 通史』－③	山本 剛	26
(翻訳・解題)ヒュイツン編『新版 教育学・初等教育事典』所収 の吉田熊次署名項目「日本」(4)	杉山 大幹 長谷川 鷹士	28
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(7) 嘉納塾における嘉納治五郎(その2)	富岡 勝	33
刊行要項(2015年6月15日現在)		36
短評・文献紹介 飛鳥圭介「おじさん図鑑」について(谷本宗 生)、對馬達雄『ヒトラーの脱走兵』について(山本剛)、井上義 和「深志の自治」から考える未来の伝統校」について(富岡)		37
会員消息 谷本、富岡		38



図 2: 「頌徳之碑」と「亡友記念碑」



(筆者撮影)

石碑がある場所は人通りが少なく、樹木の陰になっていることもあってか、学生・教職員にもほとんど知られていないようである。説明書きもなく、碑文も汚れや劣化のせいで判読が難しい。教育学部事務所、隣接する附属幼稚園に問い合わせたが、石碑の来歴についての情報は持ち合わせていないとのことだった<sup>1)</sup>。

こうした経緯を受けて、筆者が資料調査を行った結果、これらの石碑が、実は教育学部の前身である鹿児島県師範学校に関わるものであることが明らかになった。以下に建立の経緯、その後の変遷を紹介する。

### 建立の経緯

鹿児島大学附属図書館、鹿児島県立図書館や国会図書館デジタルコレクションに収められた資料を確認したところ、『鹿児島県師範学校施設要項』に石碑

に関わる内容が確認できた。以下は「亡友記念碑」に関する記述である。

卒業生或ハ在學生ニシテ死亡スルモノ漸ク多キヲ以テ明治二十四五年ノ頃当時ノ在學生亡友記念碑建設ノ議ヲ卒業生ヨリナレル鶴嶺会ニ議リ共同事業トシテ卒業生在學生ニテ費用を寄附シ建設地ヲ鹿児島市城山公園内トシ永久無料貸付ノ許可ヲ得テ夫々計画シ碑銘ハ故本県師範学校長黒田才蔵氏ノ筆ニナリ碑文ハ同校長ノ撰ニナル<sup>2)</sup>

亡友記念碑は、生徒からの呼びかけで同窓会組織鶴嶺会の費用負担にて城山公園内に設置された。明治 25 (1892) 年の 8 月 29 日に石碑の完成式典が執り行われた。

頌徳之碑についても記述があった。それによると、亡友記念碑建立にも関わった前師範学校長黒田才蔵のため、今回は卒業生側が中心となって運動し、実現したということであった<sup>3)</sup>。

『要項』によると、亡友記念碑の「建設地ヲ鹿児島市城山公園内トシ永久無料貸付ノ許可ヲ得」、頌徳之碑は「亡友記念碑ノ傍ニ建」てられたという。これを手がかりに「鹿児島島の金石文」(『鹿児島市史 第 3 巻』所収)の城山町に所在する碑文をあたったところ、「鹿児島県尋常師範学校亡友紀念之碑(城山町)」および「頌徳之碑(黒田才蔵碑文)(城山町)」の碑文が確認できた<sup>4)</sup>。碑文は問題の石碑 2 基と一致していることが確認できた。

## 移設の経緯

現在問題の石碑が立っている土地は 1934 年に鹿児島市に編入されるまでは中郡宇村であったため、石碑は鹿児島市内の城山公園内に建立された後、当地に移設されたということになる。

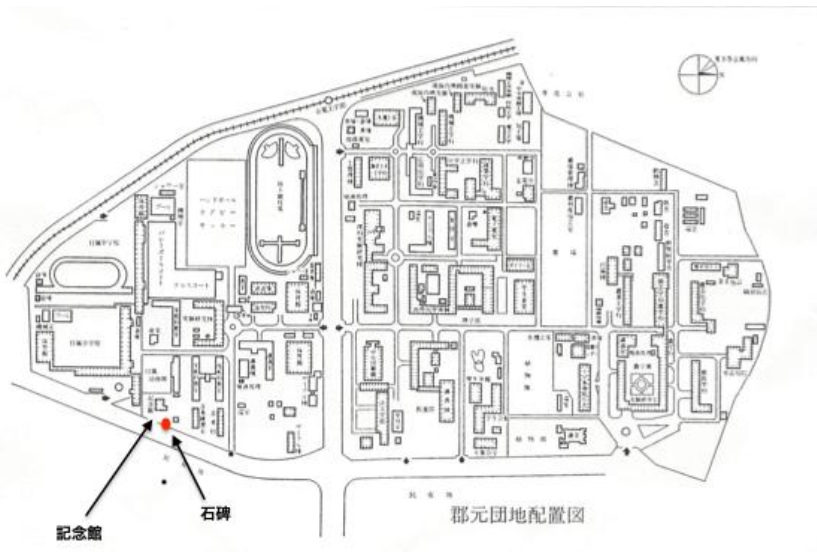
その経緯については、『鹿児島大学三十年史』に記述があった。

鹿児島師範学校創設以降の亡師亡友記念碑は、師範学校同窓会が、鹿児島市山下町城山登山口に建立したものであるが、80周年記念事業の一つとして、記念会館隣地に移した。昭和38年12月14日に築庭が竣工している<sup>5)</sup>

引用文中にある「80周年記念事業」は、鹿児島師範学校が1876年(明治9年)に創設されてから数えて80年目にあたる1956年(昭和31)に行われた<sup>6)</sup>。

当時のキャンパスマップを確認すると、現在附属幼稚園の一部となっている土地に「記念館」が見える。記念館の前庭に、石碑は立っていたのである。

図3 1980年当時の郡元キャンパスのマップ



(出典:鹿児島大学三十年史編集委員会『鹿児島大学三十年史』鹿児島大学、1980年、857頁。記念(会)館の位置を示すため一部手を加えた)

その後、老朽化を理由に記念会館は取り壊されたが、石碑はこの場所に残された<sup>7)</sup>。

### 旧所在地探訪：結語にかえて

亡友記念碑と頌徳之碑は、それぞれ明治 25 年と 29 年に、鹿児島県尋常師範学校生徒と卒業生たちによって、亡くなった生徒と恩師の追悼を目的に、当初は「城山登山口」に建立された。戦後、鹿児島県における教員養成学校創設 80 周年の節目に、同窓会が鹿児島大学郡元キャンパス内の同窓会記念会館前に移設。記念会館解体後も石碑は同地に残された。おおよそそのような変遷を経て現在に至る。

最後に、旧所在地である「城山登山口」を訪ったときの印象を述べておきたい。

城山は標高 107 メートルの小高い丘陵で、島津氏の居城鶴丸城（鹿児島城）はその麓に築かれた。1890（明治 23）年には一帯が鹿児島市初の公園に指定されている。鹿児島最大の繁華街である天文館からもほど近く、頂上まで遊歩道が整備された自然豊かな観光地である。上述の「城山登山口」は現在使われている「城山自然遊歩道」の入口とは別で、注意しなければ見落としてしまう。入口から続く坂道は砂利敷きで、「露国皇太子ニコラス殿下来■記念碑」の路標が立っている<sup>8)</sup>。

今は路標が示すロシア皇太子来鹿の記念碑のみが残されているが、かつてはその傍らに記念碑が複数立っていた。当時の記録を引用する。

照国神社裏手。浩然亭跡から、最初に公園となった一帯で、いまは木立。ほとんど訪れる人もないままひっそりとたたずんでいる。（中略）斜面に点在する記念碑の中で一番高いところにあるのが「露国皇太子ニコラス殿下来■（がい）記念碑」（中略）この碑のすぐ右隣には「英国皇族コンノート殿下の碑」（中略）少し時代が下がると、明治二十五年に建った県尋常師範学校

同窓生の「亡友記念の碑」その横には同校長、黒田才蔵先生頌徳碑。さらに市議会議長だった染川権輔の碑、日露戦争で活躍した瀬戸口大尉の碑—など<sup>9)</sup>

急な坂道を登り、かつて石碑が立っていた場所をじっさいに見てきたが、ほとんど立ち入る人もなく寂れた雰囲気であった。

図 4 旧所在地の様子



(筆者撮影)

構内に石碑を見つけた当初は、キャンパスの端に打ち捨てられているような印象を受けた。しかしその来歴をたどると、追悼の碑を建てた生徒たち思いを継承する「後輩」たちによる尽力の跡が見えてきた。

物好きが一人で楽しむだけでは惜しいと考え、今年の「教育原論」の授業からさっそく、地域の教育史を学ぶ教材として学生に紹介している。志半ばで世を

去った生徒や恩師、そして彼らを悼み碑を残した先人たちに思いを馳せると同時に、教職を志す学生が、自身を歴史的文脈の中で捉え直す契機となることをねがって。

[付記] 調査に際しては、鹿児島大学教育学部事務所、鹿児島県立図書館調査相談係、鹿児島市企画財政局企画部政策推進課の皆様にご協力を賜った。ここに記して深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) 郡元キャンパスに所在する歴史資料に関する情報がまとめられた HP 「Time Travel Kadai」の「Map」ページで鹿児島大学構内に点在する石碑の位置が確認できる (<https://sites.google.com/view/timetravel-kadai/map?authuser=0>)。
- 2) 鹿児島県師範学校『鹿児島県師範学校施設要項』鹿児島県師範学校、1911年、36頁。なお、引用文中の旧字体はすべて新字体に置き換えた。
- 3) 同上。
- 4) 鹿児島市史編さん委員会『鹿児島市史 第3巻』鹿児島市、1971年、782-784頁。
- 5) 鹿児島大学三十年史編集委員会『鹿児島大学三十年史』鹿児島大学、1980年、199頁。
- 6) 「記念会館」もこの記念事業の一環として建設された(前掲書、170頁)。
- 7) 記念会館解体後、附属幼稚園の拡張のため石碑も移設が余儀なくされたが、「場所的にも由来があり、慰霊祭との関わりもある」として僅かな距離の移動にとどめられた(鹿児島大学五十年史編集委員会『鹿

児島大学五十年史』鹿児島大学、2000年、173頁）。

- 8) ■は鹿兒の合字である。なお、現在使われている城山自然遊歩道には2箇所入口があるが、旧登山道入口は「探勝園側入口」に近いところにある

( <https://www.city.kagoshima.lg.jp/kankyo/kankyo/hozen/machizukuri/kankyohozen/shizen/documents/shiroyama.pdf> )。

- 9) 毎日新聞鹿児島支局編『城山物語』春苑堂書店、1969年、144-145頁。

## 大東文化大学体育連合会『スポーツ大東』創刊号に寄せて

### — 理事長南條徳男と教養部長村田克巳からの祝辞 —

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

大東文化大学は、1960年代後半以降の東松山校舎(埼玉県東松山市)の開設を機として、広大な敷地に近代的なグラウンドや体育館などの関係施設を整備し、加えて大東体育部や学生自治会体育連合会の組織にともない、より顕著に学生らのスポーツ活動が充実していったものといえる。この点については、『大東文化大学百年史』中巻(2025年)でも詳しく記されている。

『大学百年史』中巻では、体育部長の金子昇と体育後援会長の綾部健太郎と大学後援会長の岸信介からの祝辞は紹介されているので、本稿では、『スポーツ大東』創刊号(1968年)に寄せられた理事長・学長の南條徳男と教養部長の村田克巳の祝辞を取り上げたい。

\*\*\*\*\*

#### 大東文化学園理事長・大東文化大学長 南條徳男

今般、大東文化大学体育連合会が、各部活動を纏め、『スポーツ大東』を編纂することは、新しいスポーツムードの中に、大きく飛躍しようとしている全運動クラブに、大いなる刺激を与える意味においてたいへん意義あることに思われ、ご同慶に堪えません。

大東文化大学は、創立四六年の光輝ある歴史を有しているが、スポーツに関しては従来、柔、剣、弓の武道関係のみであった。しかし一年前に体育部を設置して以来、近代スポーツとくに陸上競技、スキー、スケート、野球等に急激な進歩を遂げ、一躍大学の名を高らしている。

元来スポーツの成果は、一日で果たせるものではなく、長年月をかけた研究、努力により、体力、技術、人格の向上をもって成果といえる。人類社会の進展が寸時の休止もなく、僅か一〇年前に描いた空想科学絵巻が、近代社会に現実に

現わされているのと同様に、記録の更新も驚くべきものがあるわけで、高い理想を掲げ、計画的に未来を踏破して行かねばならない。そのため、学生諸君は日夜勉強を怠ることなく、スポーツマンとしての誇りと自覚を保ちつつ技術を練磨し、人格修養に精進しなければ、いつの日か時代に取り残されてしまう。

栄光への道は、並々ならぬ努力、己の限界の拡大、技術、体力、品位の向上によってのみ獲得されるものである。スポーツの伝統に乏しい本学において、これからの学生諸君は、この栄光への道を走る非常な努力を続けなければならないが、しかしまた一方において、名誉な立場にもいるともいえる。なぜならば、諸君たちはその手、その足、その体で本学の輝ける伝統をつくっていけるからである。

今年度のスポーツ界は、大東文化大学に大きく注目し、これからのスポーツ界進出に大いなる期待の念を持って見つめている。諸君たちはこの期待に対し、裏切ることなく、大いに奮起し、闘士を駆り立て明日の日本、ひいては全世界を背負う若者たらんことを信じている。

“スポーツ大東”の創刊を祝し、且つ体育連合会の発展を祈る。

## 大東文化大学教養部長 村田克巳

体育連合会誌創刊号発刊に当たり、心からお慶びを申し上げるとともに、諸君の日頃の研鑽、努力に対して、敬意を表わします。我が大東文化大学体育連合会も、昨秋新組織態勢のもとにスタートし、この傘下に所属するクラブ数は二四、全部の関係部員数は約六〇〇名を擁し、各クラブがその目的達成に向かって、旺盛な活動をしていることは、誠に喜ばしいものがあります。今後いっそう新しい環境のうえに立って、よりよい伝統をつくり出すよう努力されんことを希望いたします。

思うに、昭和四二年度中における、体育連合会の大学内外における諸活動は、実に積極的且つ、目覚ましいものがありました。学内にあっては、体連各クラブの組織づくりから、体育諸行事の実施運営に、また対学外的活動としては、関係諸団体主催による各種競技会に出場して輝かしい成果を修め、着々と大東文化大

学の実力を各部門において、発揮してまいりました。もちろん、このことはただ単に勝敗の結果のみを参考にしているのではなく、学園内の体育部各クラブの活動の雰囲気、一般学生を含めた全学的動きとして、きわめて有意義な形となって伝わっているように思われるからであります。

ご承知のように、近代社会における体育、スポーツの持つ教育的責務は重要で、身体的実践の活動をとおして、培われ体得された精神力と行動力は実社会での生活においても、かならずや十分なる自信を諸君に与えてくれることを確信いたします。現代の社会生活機構は、人間関係がますます複雑となって、他を生かしながら自分も生きるという共存共栄の社会機構となり、私たち個人は社会共同体の一構成メンバーとして、持ちつ持たれつの関係で、生存しています。したがって、個人が心身ともに健康で、しかも特有の能力を社会のために活用することは、共同体の一構成員として当然の義務であり、責任でもあります。

どうかその意味において、現在体得しつつある体育、スポーツの活動をとおして、十分なる練磨を積み重ね、進歩的な健康理念を育成し、誰からも親しまれ信頼される立派な人間性の向上をはかり、悔いのない大学生活を過すよう努力してほしいと思います。以上のように、現代体育、スポーツ活動の意図するものは、身体活動をとおして立派な人間形成をはかることであると確信いたします。日頃のトレーニングや、プレー中に自然に体得するフェアプレーの精神は、そのまま諸君の日常生活の行動とし現われなくては意味がありません。何事に対してもベストを尽す闘魂、根性意欲こそ、社会生活においても諸君が、他から好かれ信頼されるに、きわめて重要な要素であります。その他、対人関係に現われる行為としては、礼儀、尊敬、寛容、親和等の態度であります。これらの点についても、運動部生活をとおして十分体得し、精神練磨をはかり、現代社会にとくに必要な倫理観を養い、学生生活をより有意義に過ごしていただきたい。このことは、少なくとも現代社会が、体育に対して要請する課題でもあると思います。

なお一般的に問題とされることは、学問とスポーツ活動を両立させることで、この点は、きわめて学生諸君にとって困難なことではあるが、しかし諸君の若い情

熱とエネルギーによって、ぜひ各々立場において頑張ってもらいたいと思います。困難を乗り越えてこそ、初めて感激の喜びを十分に味わうことができるのであります。学問をとおし、またスポーツ活動をとおし幅広い人間育成をはかる、ここに学生スポーツの価値も生ずるのではないのでしょうか。それには、各部門、分野における科学研究が必要であります。ともすると、身体的実践活動の面のみ走りがちで、現在の体育部活動に対して、スポーツトレーニングの理論的究明、トレーニング・テクニックの科学的練習法など、積極的、消極的両面を加味した広範なトレーニング方法を開発する必要があると思います。

厳しい訓練は、成長発育旺盛な諸君たち若人にとって、もっとも必要な刺激剤であり、このことは生物成長の三原則の一つとして考えられていることでもあります。あらゆる生物にとって、この適当な刺激は健全な発育、発達を遂げるうえに重要な要素であるといわれています。学園の素晴らしい伝統は、諸君の持続的な訓練努力によって築き上げられ、今後大東文化に集う後輩諸君によって、かならずや受け継がれることを確信いたします。終わりに、我が大東文化大学体育連合会、各クラブの発展と成果の向上を願い、感激の共有に青春の大学生活の日々を過ごしたいものと存じます。

\*\*\*\*\*

ちなみに、当時・教養部長であった村田克巳については、NL125号の短評欄でも言及したが、大学の教職員としてだけでなく、学園理事職としても長く携わり「教育と学園の経営にすべてを捧げた先生」とも称され、柔道部や野球部、陸上競技部の部長も歴任した・とされる情熱的な人物であった。

## 大正時代の女子高等教育(76)

### 金城女子専門学校(6)——中等教員無試験検定資格をめざして

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

#### 金城女子専門学校

1927(昭和2)年3月、財団法人金城女学校寄付行為と金城女学校専門部設立が認可された。専門学校開校式に先立って、認可条件の一つになっていた教室の増築、設備の充実として、家政館が同年8月に竣工した。木造3階建、1階は半地下で洗濯室と研究室、2階は割烹教室と試食室、3階は合併教室(裁縫教室)、ミシン室等に分かれていた。総坪数120坪7合5勺。旧割烹室は改造されて化学実験室となった。この家政館は当時としては最高の設備を整えていた。同年9月14日、学校名を金城女子専門学校と改称し、開校式が校庭で生徒、父兄、来賓千数百人を迎えて行われた。

理事会は金城女子専門学校の発足とともに、将来計画として、女子大学設立を決議した。市村與市校長は、1927年、創立38周年記念祝賀式で「三十八年の追憶」を語った後に、将来計画を明らかにした。その第一に、「今後十年ヲ期シテ金百五十万円ノ資金ヲ募集シテ完全ナル女子大学ヲ建設スル事」を上げている。他には、図書室の整備、音楽館の新設と専門学校内に音楽科の増設、雨天体操場の増築、寄宿舎の拡張、大講堂兼礼拝堂の建築、幼稚園・小学校の新設、同窓会館の新築を上げている。

#### 中等教員無試験検定資格をめざして

金城女子専門学校(以下、専門部と表示)は中部日本における最初の女子専門学校であったが、開校当初は定員割れで経営は厳しかった。そこで専門部卒業生に中等教員無試験検定の資格が付与されることをめざし、教授陣の強化をはかった。1929(昭和4)年11月、英語の教員として、名古屋高等商業学校から鈴木謙吉、源馬治郎、名古屋高等工業学校から谷口英を迎えた。さらに1931(昭和6)年には、国語の教員として、神宮皇學館から酒井秀夫、京都帝

国大学から澤瀉久孝を迎えた。その他八高教授の堀井義治（漢文）、名古屋図書館長・阪谷俊作（国語）、名古屋高等商業学校教授の鈴木得二（教育）、医学博士・平松禮太郎（育児看護）、医学博士・武藤昌知（生理衛生）、医学博士・石森國臣（食物理論）、医学博士・辻亮吉（化学）、愛知医科大学教授・辻村三郎（物理）の諸氏を迎え、生徒の学力の充実をはかった。

しかし、無試験検定の資格を得るには、初代の生徒たちは文部省の国家試験に合格しなければならない。そのために市村校長以下教授も生徒たちも夏期休暇を返上して、一致団結して取り組んだ。受験生は寄宿舎に合宿して、ひたすら模擬試験を受け、検定試験の受験に備えた。中には途中で断念する生徒もおり、家政科第3学年の生徒は当初20数人いたが、受験したのはたった1人だった。

学校を挙げての取り組みが功を奏し、1929（昭和4）年7月、家政科卒業生に、翌年4月、英文科卒業生に、1932年4月、国文科卒業生に、それぞれ中等教員無試験検定資格が付与されることになった。1932年10月8日、創立43周年記念祝賀会は、「資格許可祝賀会」として、名古屋市公会堂において盛大に行われた。来賓、父兄、同窓生、職員、生徒の1,000余人の来会者となった。記念行事として祝賀バザーが10月15～17日まで行われ、延べ約2万人が訪れた。

さらにこの翌年3月、愛知県から国文科卒業生に尋常小学校本科正教員、英文科卒業生に尋常小学校本科正教員及び小学校専科（英語）正教員、家政科卒業生に尋常小学校本科正教員、小学校専科（裁縫・家事）正教員の無試験検定資格が付与された。

### **施設の充実、高女部の発展**

1931（昭和6）年、高女部の入学志願者が急増したので、定員を1学年150人、総定員750人に変更する申請と、付属高等女学部設立者を財団法人金城女子専門学校に変更する申請を文部省に提出し、翌年5月、認可された。ただし、1934年度より不足する教室の建築を計画実施することが条件であった。そのため1931年12月～1937年3月にかけて隣接地を次々と購入していった。運動

場に当て、金城女子専門学校の図書館を創設し、高女部の校舎を新築し、「地塩館」と命名した。そして1936(昭和11)年12月には待望の大講堂「栄光館」(鉄筋コンクリート造3階建塔屋付延べ654坪余)が竣工した。

### 選択科に点茶科・挿花科復活、タイプライター科新設

1935(昭和10)年11月、専門学校学則を改定し、点茶科と挿花科を廃止して、「家庭生活ノ準備ヲナスヲ主眼トス」る修業年限2か年の家庭科を併設した。入学定員は40人、入学資格は家政科と同じく、修業年限4か年または5か年の高等女学校及び指定女学校を卒業した者で、時局のニーズに応じるものであった。明治時代から選択科(別科)として音楽科、点茶科、挿花科があったが、この家庭科併設により、点茶科と挿花科が吸収された。しかし、両科に対する要望が大きく、翌年復活した。また、1936年10月、別科としてタイプライター科が新設され、募集を始めた。当時、金城女子専門学校は、専門学部、高等女学部、選択科からなり、選択科には次のようなものがあった。

音楽科:修業年限3か年以上 ピアノ科・オルガン科・ヴァイオリン科・ヴォーカル科

タイプライター科:修業年限1か年以上 邦文タイプライター・英文タイプライター

点茶科:修業年限3か年以上

挿花科:修業年限3か年以上

選択科のタイプライター科、点茶科、挿花科は専門部・高女部の生徒たちも自由に選択することができた。

### 大講堂の新築

1936年12月、大講堂が落成し、栄光館と名付けられた。旧講堂は、1908(明治41)年に当時理事だったハリー・マイヤスと彼の姉のマーサ・マイヤス・ローガンの寄付により建てられたもので、老朽化が進んでいた。1階は200人収容

の講堂で、2階が図書室と教室になっていた。1927年に金城女子専門学校が設立認可され、生徒数は500人を超えていた。金城の教育の中心である霊性教育がなされていた講堂は、天井の低い薄暗い講堂で、長椅子を取り払って、立ったまま、毎朝礼拝を行っていた。階上の図書の重みでいつ天井が落ちるかわからず、両側に支柱を立てワイヤーで天井を吊り上げている状態だった。1931年に高女部を卒業した加藤愛子は、「1年当時は芋ころのようにぎっしりとつめこまれ、上級生になると電信柱級の私達は、立ちん棒の悲運に泣かねばならなかった」（『みどり野』第20号、昭和6年、『金城学院百年史』より）と記している。

このような状態だったので、教職員と生徒たちは「主よ、新講堂を与え給え」と祈り、1930年、新講堂建築の準備に入った。県の指導で次々と隣接地を買収し、生徒たちは1928年ごろから各自の小遣い銭を節約し、毎月10銭ずつ積み立て、9年間で



新講堂「栄光館」（『金城学院百年史』より）

7,800円余となった。教職員も各自の俸給の中から、毎月何円かを寄付し、後援会の中に積み立てた。同窓会は1口10円、会員は1口以上を負担し、バザーを開き、純益金3,300円余を寄付した。神戸支部は講習会や「五十銭会」運動、音楽会を開催して523円余を寄付した。東京支部でも音楽舞踏会を開き、1933年4月、第28回高女部卒業生、第7回専門部卒業生は120円を寄付した。みどり野会、父兄会もそれぞれ一致団結して募金活動を展開した。後援会は名古屋市公会堂で新春座の森英治郎主演の劇「ハムレット」を開催して純益金5,000円余を寄付した。原田積善会は後援会を通して5,000円を寄付した。

こうして教職員、生徒、同窓会、後援会が一致協力して資金を集め、1936（昭和11）年12月11日新講堂が完成した。教職員も生徒も「神からの贈り物」と感じ、「すべてを神の栄光のため」という決意を表して「栄光館」と名付けた。こ

の新講堂は、明るく清新な雰囲気の大ホール、快適な音響、優美な照明装置や暗幕の特別装置、暖房装置を備え、映写室・映写幕を完備し、御真影奉安殿や荘厳典雅な礼拝堂、祈祷室、図書館などから成る当時の日本の講堂建築史上たぐい稀な講堂であった。市村は新講堂祝賀式の折「高尚な学校建築物から受ける人格的情操的感化は大である。物理的講堂は完成したが、今後は精神的人格的講堂を各々の胸の中に建設すべし。それには更に大なる決心と祈りと聖霊の御助けとを要する。」（「新講堂落成に際して」『金城学院百年史』より）という趣旨のことを述べた。長年の市村のキリスト教による女子教育の理想が込められた。

しかし、1937（昭和12）年7月、日中戦争開始、同年9月、「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、次第に非常体制が強化されていく。そうしたなかでも栄光館の新築により生徒は増えこの年の生徒総数は1,000人を超えた。1941年4月、専門部に修業年限1か年の洋裁科を設置、翌年4月、修業年限3か年の付属夜間高等女学部を新設した。この年には総生徒数が2,000人を超え、1944年には専門部も1,000人を超えた。しかし、1941年12月8日の太平洋戦争開始より、戦時下体制に入り、授業は次第にできなくなり、生徒たちは工場等へ勤労働員されていく。

1944年12月13日、米軍B29による名古屋爆撃が始まり、三菱発動機研究所に動員された高女部1年生の3名が犠牲となった。翌年1月23日250トン爆弾4個が校内に落ち、後援館を半壊した。同年3月18日夜半から19日未明にかけて、B29からの焼夷弾を雨のように受けて、鉄筋コンクリートの栄光館と門衛詰所を除いて、木造の寄宿舍、校舎はすべて焼失し、この火災によって重要書類もほとんどが焼失した。職員がかろうじて持ち出せたのは、卒業生名簿、学籍簿、御真影、勅語だけであった。さらに3月25日と30日の大型爆弾により、「神からの贈り物」と讃えた栄光館でさえも天井も窓ガラスも吹き飛び大破した。かろうじて1階にあった図書館は戦火から逃れ、戦後の新制大学設立に大きな役割を果たす。この残された栄光館をいくつか仕切って、敗戦後の授業が午前

高女部、午後専門部、夜間高女部というように三部制で行われた。天井も窓ガラスもない大講堂は、冬は凍える寒さであり、雨が降れば傘をさして授業を受けた。それでも授業を行えること、受けられることに教員も生徒も喜びをかみしめた。こうして少しずつ戦後の復興へと進んでいく。

## 金城学院大学へ

金城女子大学の設立計画はすでに1927(昭和2)年に理事会で決議されていた。10年後の設立をめざして資金の積み立ても行われていた。しかし、戦災によって校舎はすべて灰燼に帰した。それでも、1946(昭和21)年5月時点で生徒総数は2,605人となり、バラック校舎の建築を急ぎ、二部制で授業を行い、復興に専念していた。そのような折、1947年3月、愛知県教員適格審査委員会によって市村與市が教員「不適格」と認定され、公職を追放された。理由は戦時中の飛行機献納運動などの戦争協力と戦後の思想の豹変であった。市村は中央教職員適格審査委員会に「再審査請求書」を提出して、以後学校から遠のいた。翌年5月、中央教職員適格審査委員長は市村を「適格」と判定した。そして同年6月、市村は14ヶ月ぶりに学校に姿を現し、歓迎礼拝に出席した。1,600席しかない講堂に約3,000名の生徒が集まり、市村校長を迎えた。半分の生徒は通路や席の後ろに立った。市村は、「私は学校をはなれていたこの一年の間、四六時中、生徒のことを考えていた。毎朝の礼拝の時間、私は皆さんの姿を心に思い浮べて心の中で一緒に祈った。この一年間、私は書物を読み、原稿を書いた。しかし大部分の時間は聖書を読むことに費やした。そしてこれは、非常な力を私に与えた。」(マーガレット・アーチボルドの報告『プレスビテリアン・サーヴェイ』1948年9月号、近藤武一訳、『金城学院百年史』より)と語った。こうして市村は金城学院院長並びに金城女子専門学校校長に復帰した。1949年2月、新制度により金城学院大学設立認可が下りた。ここに1917(大正6)年、市村が金城女学校校長に就任して以来、実に32年来の念願が叶ったのである。

参考文献

『金城六十年史』

『金城学院八十年史』

『金城学院百年史』

『目で見る金城学院の100史年』

『金城学院創立120周年 金城学院大学設立60周年』

## 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(16):

### 『最新式入学案内』(大正6年)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、米山堂より刊行された出口競『最新式入学案内』を見ていく。

著者の出口は、同書では「東京学生相談所主」という肩書が記されている。彼は後の時代にも進学案内書を執筆している。

同書は1917(大正6)年に刊行されたが、学校案内として掲載されているのは専門学校以上の学校がほぼすべてである。数少ない例外として、「【番外】受験準備の学校 附、中学の予備校」という節が最後に設けられている。個々の予備校の学校案内も含まれているが、予備校を概説した箇所もあるので、ここでは同節の記述をすべて取りあげることにする。

なお、各学校の間、記述の内容が大きく変わる箇所は、読みやすさを考慮して1行空けを入れているが、原文では1行空けはない。

中学を卒業して、高等学校その他官立公立の専門学校に入学するには、どうしても、厳重なる試験の関門を突破しなくてはならぬ。全く、日本の学生はみじめなもので、小学校を泳ぎ出た頃から、試験々々で追ひまくられて居るかの感があるが、それも世間がその試験の合格を以て人物評価の標準にして居るのだから仕方がない。それに処するには自ら道あり、受験者がへこたれずに決心の臍を固めて当るより方法はない。元来、之等専門学校の入学試験は中学卒業を程度として課されるものであるから、真面目に中学の課程を勉強して居ればい様なものさうもいかぬ。二月又は三月、中学を出て今は殆ど四月に統一された各校の試験に依じて、それに失敗し、七月の高等学校の入学試験に依ずるとか、又は次年度の試験を待つ人は、晏如として待つべきであらうか。

此の問題たる各人の事情によるが、概して平素の用意として、受験準備の学校に入学して、次の試験期まで待つのがよい様である。その準備教育の学校が五六校ある。

#### ▽早稲田高等予備校

修業年限一ヶ年で、之を三学期に分つて四月、九月、一月等に入学を許される。学科は、修身、国語漢文、英語、歴史、地理、数学、物理、化学、博物、図画、体操等で授業は午後からである。担任教師は多く早稲田大学、同中学の講師である。出身者の年々高等学校専門学校に入学する者は頗る多いとの評判。(東京牛込区戸塚町)

#### ▽明治高等予備校

修業年限は一年半で四月一日に始まり六月三十日に終る。第一期を短期受験科と称し、第二期を長期受験科と称する。学科は早稲田と同様で、最も力を注いで居るのは数学と英語、中にも一高の教授が最も多い。(東京神田区駿河台)

#### ▽中央高等予備校

修業年限一ヶ年、九月一日に始まり翌年七月十日に終る。臨時入学も出来る。学科は前同様、担任講師は一高、高商、各種専門学校の教授。頗る質素なところがこの特色とでも言はうか。(東京神田区錦町)(類焼にて神田橋内に移転)

#### ▽専修高等予備校

修業年限は一年、九月十一日より翌年七月十五日まで。毎週の授業時間を三十時間とし、午前八時より午後三時乃至四時に終る。こゝは高商の教授が多いので高商入学志望者の集まる者が多い。(東京神田今川小路専修大学内)

### ▽東京高等予備校

凡ての点、前述学校と同様であるが、こゝでは別に高等受験準備学会なるものを設けて高等受験準備講義録<sup>ママ</sup>を発行し又た時々模擬試験を挙行して学力と同時に試験度胸を試めし、好成績を挙げつゝある。講習録<sup>ママ</sup>は長期短期に分れて居る。模擬試験は通常一年に四五回の割になつて居る。

同校当局の言ふところによると、大正五年度の諸官立学校に入学したる東京高等予備校生徒、高等受験準備学会々員の合格数は、

一高百十六名、二高六十二名、三高二十七名、四高三十五名、五高二十二名、六高十六名、七高三十二名、八高三十名、千葉医専十七名、新潟医専十二名、金沢同五名、岡山医専一名、東京高商十七名、長野高商二名、小樽山口<sup>ママ</sup>一名、東京高工十四名、米沢高工四名、熊本高工三名、北大工専二名、大阪名古屋高工各一名

と云ふ事になつて居た相である。(東京麹町区富士見町)

### ▽日本高等予備校

之れも、一切の事諸校と大差ないから<sup>ママ</sup>略する。修業年限は一年三ヶ月、四月より翌年六月まで、講師には一高の教授が多い。(東京神田区三崎町)

以上各校は授業料普通一ヶ月三円である。但し、徴兵猶予の特典はない、高等予備校と云ふが、その校の予科と殆ど同一であるから、予科へ入学すれば望が達せられる訳になる。

その他開成予備学校高等受験科(神田区淡路町)とか正則予備校(神田区錦町)がある、こゝで前述の専門学校入学者の準備教育としては午前に高等予備科がある、数学のみの受験準備教授をすところでは研数学館(神田区猿楽

町)がある。その他にもあるが、此の位にして置かう。

末尾に記して置くが、中学を正則に卒業が出来ぬ人のために、其の實力だけをつける学校が二校程ある。即ち、

▽開成予備学校中学科(東京神田区淡路町、東京開成中学校内、修業年限四年、入学期四月)

▽錦城予備学校普通科(同、神田区錦町錦城中学校内、修業年限四ヶ年、入学期四月)

いずれも夜学である。前者は授業料一円五十銭校友会費十銭後者は同一円、会費二十銭である。但し、卒業の上は、毎年举行せられる専門学校入学者検定試験に合格をして置く必要がある。(東京の分大正六年の二月、府立第三中学校にて举行)でないと、高等専門の学校へ入学の資格がない。

この本では外国語や数学のみを教授する学校が取りあげられていないが、受験準備といえここに掲載されているようなさまざまな教科を教授する学校という認識が定着していった様子がうかがえる。

東京高等予備校のところでは、卒業生の合格実績が記されている。高等受験準備学会の会員まで含んだ数字となっているが、今の予備校の合格実績においても講習会のみを受講者を含んでいることが多々ある。合格者を多く見せたいというのは、今も昔も変わらないようである。

ここで紹介されているのは私立大学系の予備校がほとんどであるが、「高等予備校と云ふが、その校の予科と殆ど同一であるから、予科へ入学すれば望が達せられる」とまで言っている。事実、「五、明治中央両大学」という節の明治大学の説明には以下のような記述がある。

ところで此の予科と云ふのであるが、これは普通は其の学校の本科へ入る為

めの予備教育となつて居るけれど、寧ろ、他の高等専門学校へ入学すべく準備教育を受けに入つて来る学生が三分の二を占めて居るのだ。中にはこれ以上の割合をもつ学校もあらう。予科と高等予備校との二つの名義があるが、此の予科に沢山の生徒を入れる事によつて多くの私立大学はその経済を維持して行きつゝあるのである。之れは別に『受験準備教育』の項に書かう。

このような点は明治大学に限ったことではなく、他の学校にも言えることである。予科と予備校との関係については、筆者も以前に触れたことがあるが（『近代日本における「受験」の成立：「資格」試験から「選抜」試験へ』（ミネルヴァ書房、2019）の第3章）、大正期にもなると受験生の側にもこのような情報が提供されていたということである。

次号からは、1918（大正7）年に刊行された『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』を検討していく。

## 資料から見る「教育」の歴史⑤

### —『東京工業大学百年史 通史』—③

やまもと たけし  
山本 剛 (有明教育芸術短期大学)

前号の続きである。1942(昭和17)年に東京工業大学学長に任命された八木秀次の在任期間に、同大学が提出したという「大学予科設置理由書」について、これまで見てきた。残念ながら、現時点でも同理由書の出典元は不明である。

同理由書の内容は、大学予科設置の理由を、①「基礎学科」の「修得」が不十分であると大学教育に支障をきたすため、②予科と大学との一貫教育で形成される「伝統精神」を養うため、③予科に入学することで、同大学の教育・研究に早期に触れることができるため、④大学の募集定員を増加するうえで、「質ノ低下」がないように、予科で学生の質を維持するため、などをあげている。

続いて、同理由書では、「第2 人的資源ノ国策的活用上ヨリ観タル理由」として、以下のように述べる。

東京工業大学昭和17年度ニ於ケル入学者ノ出身学校種別ハ高等学校出身者2割4分ニ対シ高等工業学校校出身者7割2分ニシテ全入学者ノ過半数以上ハ既ニ完成教育ヲ終了シタル者ヲ以テ占メツツアルハ各部門ニ於ケル工業技術人不足甚敷現下ノ実状ニ適合セザルモノト謂ハザルベカラズ依テ高等学校出身者不足ノ現状ニ於テハ特殊ナル大学ニ対シ大学予科ヲ設置スルヲ適策ナリトス

ここでは、入学者の出身学校種の割合が、高等工業学校が多く、旧制高校が減少している現状に危機感があることが読み取れる。なお、同大学の入学者資格は、旧制高校や高等工業のほかにも高等師範、大学予科などの学校種も認められており、広く門戸が開かれていた点に特徴があった。しかし、実際のところ

は、いわゆる「正系ルート」の旧制高校生の入学が少ないことは問題であった。そこで、自らで大学予科を設置して教育を行なうというのである。

同理由書の最後は、「第3 沿革的ノ事情ニ基ク理由」をあげて、大学「昇格」当初から大学予科設置を要望していたが、財政的事情等で実現できなかったことが記されている。

東京工業大学ハ昭和4年東京高等工業学校ノ組織ヲ変更シテ東京工業大学トナリタルモノニシテ予科ノ併置ハ改組計画ノ当時最熱烈ナル要望ナリシモ財政的事情等ノ為己ムヲ得ズ学部ノミ設置セラレ予科設置ハ将来ノ問題トシテ残サレタルモノナリ爾来十幾年ノ過去ニ於ケル実績ニ徴シテモ予科ノ設置ハ益痛切ニ其ノ必要ヲ感得スルニ至レリ

以上、同大学が提出したという「大学予科設置理由書」を見てきた。このように、「痛切」に大学予科設置を要望しながらも、東京工業大学が予科設置を実現することはなかった。この時期は戦時下であった。「予科問題など云ふ比較的不急の問題」であると捉えられたのである（『蔵前工業会誌』9月号、第476号1943（昭和18）年9月、6頁）。

(翻訳・解題) ビュイツソン編『新版 教育学・初等教育事典』  
所収の吉田熊次署名項目「日本」(4)

すぎやま だいき (鹿児島大学) ・ はせがわ ようじ (上越教育大学)

## はじめに

本稿は、ビュイツソン編『新版 教育学・初等教育事典』に収められた吉田熊次署名項目「日本」を翻訳する試みの第4回である。底本等については本連載第1回(124号)の「解題」、および第2回(125号)の「はじめに」を参照されたい。

## 【翻訳の続き】

将軍王朝 [dynastie des shoguns, 幕府] を開いたイエヤス・トクガワ [Iyeyasu Tokugawa, 徳川家康] は、それまで無政府状態であった各国の政治的再編者であったと同時に、学校教育 [études] の再興者でもあった。もはや廃絶していた旧大学寮に代えて、徳川家康は江戸に孔子学校 [Collège de Confucius, 昌平黌] という大学校 [grande école] を設置し、3000人の学生を集めた<sup>(1)</sup>。多くの有力な大名 [principaux daimios] も自身の地方 [province, 藩] に学校を設置した。しかしながら、これら様々な学校はサムライないし領主階級 [classe des samurais ou nobles, 藩士] の子弟しか受け入れなかった。自分の子どもに教育 [instruction] を与えたい商人、農民、職人 [les marchands, les agricultulteurs ou les artisans] は、子どもを民間の教師 [instituteurs privés] に託さなければならなかった。しかし、政府 [gouvernement, 幕府] が民衆教育 [instruction du peuple] のために何もしなかったにもかかわらず、もっとも簡単な形式の文字の読み書きや算盤を用いての計算を学んだ下層階級 [classe inférieure] の日本人は相当な数にのぼった。女性は、身分 [rang] が何であれ、公的な学校には受け入れられなかった。

女性は限られた教育 [éducation] しか受けず、民衆の言葉で [en style vulgaire] 書かれた本の読み方しか教わらず、中国古典を学ぶこともなかった。しかし少数の例外もあり、日本文学にはその深い学識や詩的才能で傑出した女性が何人か数えられる。

幕府 [shogunat] 時代の教育は、それ以前の時代の教育とほとんど変わらなかった。17 世紀から 18 世紀にかけて、ヨーロッパの影響は無に等しい。日本と最初に関係を結んだのはポルトガル人であった。しかし幕府 [gouvernement] は、ポルトガル人たちが一部の大名と企てた策略 [intrigue] に不安を募らせ、1639 年にポルトガル人たちを帝国から追放した。次にやってきたのはオランダ人たちであった。1641 年、彼らは長崎に居住する許可を得た。しかし、日本は他のすべてのヨーロッパ人に対しては鎖されたままであった。オランダ人たちもまた距離を置かれていた。年に一度だけ、長崎からの使節が将軍と対面することが許された。日本人と外国人との継続的關係は相変わらず禁じられていた。通訳 [interprète, 通詞] は会話だけによってオランダ語の使い方を身につけなければならず、オランダ語の読書は禁じられていた。18 世紀中葉、天文にきわめて強い関心を抱いていた将軍ヨシムネ [Yoshimune, 徳川吉宗] は、オランダ語の書籍を数冊手に入れ、その内容を知りたいと思った。吉宗は図書室の責任者 [directeur de sa bibliothèque, 書物奉行] であるブンゾー・アウオキ [Bunzô Awoki, 青木昆陽] に命じ、オランダ語を学ばせた<sup>(2)</sup>。そのため、青木は、毎年開かれるオランダ使節と将軍との謁見に何年も陪席し、通詞の助けのもと、なんとか初歩的知識 [connaissance de l'alphabet] を得た。その後、長崎に行く許可を得、数年間滞在し、500 あまりのオランダ語の語彙を集めた。青木はこの学びの成果を入門書と語彙集として公刊した。青木の後、医師のリオタク・マイノ [Riôtaku Maino, 前野良沢] もオランダ語の勉強に専心した。同じ頃、もう一人の医師、ゲンパク・スギタ [Gempaku Sugita, 杉田玄白] も、何人かの友人の助けを借りて、オランダ語で書かれた解剖学の論文を邦訳しようと試みていた。この果敢な企てについて伝える日本の著述家たちの語りからは、彼らはまるでエ

ジプトのヒエログリフ解読を試みるシャンポリオンのように見える。オランダ語の解剖学書を入手した杉田は、そこに書かれている学説と日本で古くから信じられているものを実際に[pratiquement]比較できないかと強く望んでいたのだという。偶然の一致で、ちょうどその時、幕府は処刑された罪人の検視を命じ、前野とともにこの検視の責任者となった杉田は、オランダ語の解剖学書の図版が人間の臓器の実際の構造と正確に一致していることを発見した。こうして、杉田は日本で古来信じられてきたことが間違っただけだと気がついたのである。その結果、杉田はそのオランダ語の解剖学書の内容が医学に有用であると確信して、邦訳を強く望んだ。杉田は通詞の助けは借りず、ただ数人の友人の協力を得た。しかし、杉田はオランダ語の知識がなかったため、どうすればよいのか分からなかった。彼はオランダ語のアルファベットの勉強からはじめ、次いで単語を覚えていった。そして本来の意味における翻訳に取り掛かった。しかし、1つの単語の翻訳に1日以上かかることもあれば、1つの文章の意味を理解するのに数日かかることもしばしばであった。このような困難を前にして、杉田の協力者たちはこのような仕事の完遂は不可能だと直言した。しかし杉田はこう応えた。「この仕事は人間の力を超えるものではない。しかし、天[ciel]の助けが必要だ」。この仕事を行う日は決まっていた。結果として、6人の学者からなる結社[société]が作られた。休みなく何年にもわたり、彼らは会合を持ち、ともに作業を続けた。翻訳は次第に進み、外国人の力を一切借りることなく、細部に至るまでオランダ語の知識を獲得し、毎年、前年の作業で生じた誤りを見つけ、修正した。4年もの間このような作業を続け、11回の執筆と推敲を経て、ついに彼らは翻訳を成し遂げた。この作品には『新しい分析的解剖学書』[*Nouveau livre d'anatomie analytique*, 『解体新書』]という題名が付けられた。この書は印刷、出版され、幕府、京都の貴族たち[nobles]に献上された。このようにして、日本人は自分たちがオランダ語の書籍を翻訳することができると知った。そして同時に、人体の解剖学的構造[anatomie]に関する真理も知ったのである。これら二つの成果は、杉田の行動力と粘り強さによるものである。

他の日本人の学者たちもオランダ語書籍の研究と翻訳を続けた。その結果、19世紀前半には、医学、自然諸科学、地理学に関する新しい考えが帝国に広まった。1854年以降、アメリカ人、ロシア人、イギリス人、フランス人らと将軍は通商条約[traités de commerce]を結び、ヨーロッパの諸学問はますます日本に浸透した。西洋[Occident]の原理に則って教える医学校が江戸に設置され、外国語を学ぶための学校も設置された。1860年、幕府はアメリカに使節団を送り、翌年には数名の日本の若者がそれぞれの学びのためにヨーロッパに向かった。

その頃、幕府の瓦解を導くこととなる内戦[guerre civil]が勃発した。幕府が諸外国政府と協定を結んだことを非難して、幾人もの大名たちが反旗を翻したのである。しかし、この戦いの結末は予想とはまったく異なるものであった。将軍の権力が叛徒[insurgés]によって覆され、天皇が復権したのである(1868年)。しかし、その当時、天皇は革新派の先頭に立っていた。大名たちは自身の旧来の特権が剥奪されるのだと気が付いた。そして、古い封建制の廃墟の上に、ヨーロッパ風の政府が樹立された。帝国はフ[fu, 府]、ケン[ken, 県]という行政区画に分割された。プすなわち都市[pu ou cites, 府]は3つあり、東京、京都、オサカ[Osaka, 大坂]の3都市によって形作られた。ケンすなわち県[ken ou départements]は35あり、蝦夷の植民地政府[gouvernement colonial de Yezo, 蝦夷の開拓使]を除く残りの領土を覆っていた。政府の最高権力者である天皇の權威[autorité]のもと、国政は9つの省[ministère]に委ねられた。すなわち、外交、内政、財務、戦争、海軍、公教育、公共事業、正義、帝室の各省[Affaires étrangères, intérieur, finances, guerre, marine, instruction publique, travaux publics, justice, et maison impériale, 外務、内務、大蔵、陸軍、海軍、文部、工部、司法、宮内の各省<sup>(3)</sup>]である。十進法に基づく新しい通貨制度が創設された。通貨単位は円で、現在のアメリカ・ドルの半分に相当し、100 銭に分割される。すでに述べたように、天皇はその住まいを江戸に移し、江戸は東京に改名された。そして 1868 年、「明るく治める」[gouverner clairement]を意味する明治[Meiji]と名付けられた新しい時代

が始まった。

## 注

(1) 歴史的事実としては誤りである。昌平坂学問所のもとになる林家の家塾設置時期は3代将軍家光の治世。幕府直轄の昌平坂学問所になるのは1797年、松平定信が老中をつとめたころである。

(2) 昆陽がオランダ語の学習を命じられたのは1740年前後のことであり、当時は御書物御用達である。書物奉行就任は1767年である。

(3) 国政を9つの省庁で実施していたのは1877年1月～1881年4月頃までなので、この間を指していると考えられる。

## 『嘉納治五郎』(1964年)を読む(7)

### 嘉納塾における嘉納治五郎(その2)

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

#### はじめに

第126号より、『嘉納治五郎』(講道館、1964年)を通して、嘉納治五郎が創設した嘉納塾における嘉納治五郎の取り組みをしていたかを検討している。

前号では、基礎的な情報として、嘉納塾を中心とした略年表を紹介した。

本号では、創始時の嘉納塾について述べていく。

#### 嘉納塾創始の経緯

1882年に創始された頃の嘉納塾について、『嘉納治五郎』は次のように記している。

嘉納塾は始めはただ知人の子弟をあずかっただけのものであり、嘉納塾という名も、何時きめたというのではなく、嘉納の下に集まってきたからというだけのものであり、特に規則もなく、全く家庭的な集まりにすぎなかった。

(115頁)

このように、嘉納塾は特段の規則なしに始められたが、「当時貴重視された学士の身でありながら、身辺を飾らず、一書生のような生活を続け、学習院教頭としての職務の余暇に、諄々として塾生を教導した嘉納の熱意と人柄とによって、おのずからつくりだされた塾風は、次第に世の同調を集め、子弟の入塾を願う者も多く、塾生は年と共に増加していった」(115頁)という。

#### 年齢による区分

嘉納塾では、塾生の年齢に応じて、成年舎、中年舎、幼年舎に分けていた。これは、「嘉納は、子弟の教育はその心身の発達に伴って、それに適当な教育法をとるべきであると考えて居」たことによるものであった(116頁)。

## 我儘・懦弱への警戒

1884年、嘉納が塾生の訓育について、改めて方針を樹立した。これについて、『嘉納治五郎』には、「嘉納は自分のものに託された子弟が、多くはその家が財産も豊かで、書生や召使などから大事に扱われるために、つい我儘、懦弱に流れがちであることに注意した。艱難が人の玉成に益あるを信じた嘉納は、厳格な規則を設け、嘉納自ら起居を共にして、塾生の訓育に当たった」（123 頁）と述べている。

つまり嘉納は創始期の嘉納塾において、裕福な家庭出身の塾生がつい、我儘で懦弱な生活に陥りがちであるのを見て取って、自ら起居を共にして塾生に規律ある生活をさせようとしたらしい。

## 富田常次郎の回想

嘉納塾創立の最初から嘉納にしたがっていた富田常次郎の回想が『嘉納治五郎』に記載されているので、紹介する。

下谷永昌寺で講道館と共に成立した嘉納塾は、嘉納を中心とした家族的な子弟の共同生活であった。明治十六年、上二番町に転居した頃から、公務多忙のため嘉納が不在がちとなったので塾生は自らの修行生活を規律あるものにするため、相謀って「舎中同盟規約書」を作り、相互にこれを遵奉することを誓った。

(p123 頁)

明治十九年一月、塾舎は麴町富士見に移ったが、同三月、嘉納は「塾生教育の主義を貫徹し、完美なる塾風を養成せんがため……厳格なる塾則を設け」ねばならぬとして、「塾内規則書」を定めた。そして嘉納は「止まらんと欲するものは止まり、去らんと欲するものは去れ」という意気ごみであった。

「塾内規則書」

一、在塾生ハ心身ノ上ニ如何ナル艱苦アルモ之レヲ辞セズ師ヨリ受クル所ノ道ヲ守リ唯命之レ従ヒ以テ完全ノ人タランコトヲ期セザルベカラザル事

一、在塾者ハ左ノ三道ヲ守リテ片時モ之レニ背ク可カラザル事

第一弟道 弟道トハ師弟ノ道ニシテ師ニ対シテハ恭敬ヲ専ラトシ堅ク自ら其ノ分ヲ守ルヲ云フ

第二友道 友道トハ同窓学友相互ニ守ルノ道ニシテ異体同心の精神ヲ以テ短長相補ヒ苦樂相共にシ互ニ親和シテ信義ヲ失ハザルヲ云フ  
第三 我道 我道トハ同窓学友ニアラザル社会一般ノ人ニ対シテ守ルベキ彼我ノ道ヲ云フ

一、在塾者ハ左ノ師命ヲ堅ク相守ルベキ事

- 第一 晨起就寝之事(略)
- 第二 本務注意之事(略)
- 第三 相互心得之事(略)
- 第四 外来人応接之事(略)
- 第五 役員之事(略)
- 第六 懲戒之事(略)

こうした塾内規律を定めたが、それには、嘉納の父と親交のあった上野・浄名院の住職との交際を通じて、嘉納が見聞した律宗の厳格な戒律に学ぶところが大きかった。

塾生たちは、はじめ規則が厳格なのに苦しんでいたが、後には、よくこの規則を守り、かえって規律ある塾生活の中に喜びを感じるようになったようだ云々。

(125 頁)

### 寺院教育がモデルか

この富田常次郎の回想から、嘉納塾創始当初は嘉納がみずから共同生活の中心となっていたが、1年後の1893年ごろから公務多忙のために不在がちになり、「舎中同盟規約書」や「塾内規則書」が必要とされるようになったこと。そして、「塾内規則書」の内容は、戒律の厳格な律宗がモデルになっていたらしいことが分かる。

次号では、創始期の嘉納塾について、さらに紹介していきたい。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は続きます。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の典拠を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

---

## 短評・文献紹介

---

エッセイストの飛鳥圭介さんが記された「おじさん図鑑」『東京新聞』（2005年7月13日）を読んでいて、「知か値か」という記事内容におかしくもあり驚きました。ケイケンチと漢字で表記する場合、飛鳥さんいわく大概のおじさんならば、経験知と書くだろうと。ところが、岩波書店の『広辞苑』によれば、正確には経験値であり、これまでの経験から推測して得られる値・なのだという。ところが、三省堂の『新明解国語辞典』をみると、経験知も経験値も両方記されていて、前者は日常生活のさまざまな経験や社会での種々の見聞を通して、直接に体得した知識や知恵といい、後者は特定の経験をしたことで得られる値を定量化したもの・なのだとしているようだ。さらに笑えるのが、この自称・おじさんである飛鳥さんは、『広辞苑』の版元に対して知を忘れるな!と投書するつもりなのだと。これは、なかなかシヤレがきいていますよね。（谷本）

本当の歴史研究とは何かを学ぶことができました。對馬達雄氏の『ヒトラーの脱走兵-裏切りか抵抗か、ドイツ最後のタブー』（中公新書、2020年）を読みました。第二次世界大戦のドイツ国防軍の脱走兵について、死刑判決を受けた者は、3万人以上と、他国に比べて際だって多い。その多くは戦闘中の逃亡ではなかった。歴史を学ぶことがいかに大事であるのか、この書を読みながら痛感しました。（山本剛）

井上義和（研究ノート）「「深志の自治」から考える未来の伝統校」（『帝京大学共通教育センター論集』第16号、2025年）を読んだ。

<https://teikyo-u.repo.nii.ac.jp/records/2027535>

台風の影響で中止となってしまった昨年の夏期教育セミナーでの基調報告原稿をもとにしているとこの研究ノートが書かれたと記されているので、今年の8月30日・31日の夏期教育セミナーで予定されている井上さんの基調講演の予習になるだろう。

この研究ノートでは、松本深志高校の自治を事例に、「地方の公立伝統校が危機の時代を乗り越えて、未来に生き残るためのヒント」を探すために、「`悪しき伝統、にどう向き合うか?」という問いを立てて考察している。ここで言う`悪しき伝統、とは、各地の伝統校にしばしば見られる`パワハワ応援歌練習、のように、近年、賛否がしばしば深刻に対立しつつあるような論点を指している。

井上さんは、限られた史料を駆使し、鋭い着眼点で1952年という転換期を見だし、ストーリー性豊かに展開して、「答えは歴史のなかにある」という結論につなげている。面白い上に説得力もあるので、非常に参考になる。ただし、もう少し考えたら質問してみたいことが見つかりそうな気がする。この研究ノートを読み直しながら当日を迎えたいと思う。

（富岡）

---

## 会員消息

---

このNL編集世話人を務めている、私にとっては教育・研究者の先輩格にあたる富岡勝さん(近畿大学)から、『究極の学びの場 京大吉田寮』(2024年、実生社)に加えて、このたび『京大吉田寮百年物語』(2025年、小さ子社)を謹呈いただきました。いつもありがとございます。と、素晴らしい同上書をゆっくり読んで暑い夏を優雅に過ごしたい…ところでしたが。6月下旬に、とある編集出版の方から、現今の大学・学問の危機を特集する雑誌号を近く刊行する予定ゆえ、については8月下旬までに大学の歴史などについての原稿を寄稿してほしいという急な依頼作業が入ってしまい、もっかその執筆対応に追われています。むしろ今回は時間や紙面の制約もありますので、限られた範囲でしかユニークである日本の大学の歴史の一端を記せないの、やはりもどかしい限りですね。(谷本)

「短評・文献紹介」にも書きましたように8月30日・31日の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーが近づいてきました。記念館がなかなかインパクトのあるポスターを作ってくさったので次頁に貼ります。

また、加藤さんと富岡で信濃毎日新聞のMGプレスに取材していただいた記事が、MGプレス<<https://mgpress.jp/>>に「松本の旧制高等学校記念館で伝統校の「自治」考える教育セミナー 8月30・31日」というタイトルで掲載されました。記事の冒頭には、

松本市の旧制高等学校記念館(県3)は8月30、31日、第28回夏期教育セミナーを開く。「自治の精神」が伝統とされる松本深志高校(蟻ヶ崎3)を中心に取り上げ、全国の伝統校と呼ばれる高校に息づく「自治」について、その評価や現代教育とのずれなどの課題を議論したいという。

と書かれています。

多くの皆さんと松本でお目にかかれるのを楽しみにしています。ご参加の申し込みは、旧制高等学校記念館まで、電話(0263・35・6226)かメール

<[kyusei-koko@city.matsumoto.lg.jp](mailto:kyusei-koko@city.matsumoto.lg.jp)>でご連絡をお願いします。

(富岡)

第28回

人場無料

# 夏期教育セミナー

会場:あがたの森文化会館 講堂

テーマ:生徒自治って古い? 学校における生徒自治の歴史とこれから

1日目 8月30日(土) 午後1時~5時



【基調講演】

## 「深志の自治」から考える未来の伝統校

講師 井上 義和 さん(帝京大学 共通教育センター教授)



【指定討論】

## 「伝統」を相対化するには

講師 加藤 善子 さん(信州大学 高等教育研究センター教授)



2日目 8月31日(日) 午前9時30分~12時30分

【研究発表】

旧制松本高等学校と「自治」—『校友会雑誌』を中心に

○森 いづみさん(信州大学大学院 総合人文社会科学部)

「生徒自治」から「生徒会」へ—占領期文部省の理論的展開を中心に

○猪股 大輝さん(東洋大学 文学部教育学科助教)

安積歴史博物館中学校資料の可能性

○和田 敦彦さん(早稲田大学 教育・総合科学学術院教授)

○田中 祐介さん(明治学院大学 教養教育センター准教授)

○笠井 香凜さん(早稲田大学大学院 教育学研究科) ほか

午後1時30分~3時 研究情報交換会を予定(希望者のみ)

夏期教育セミナーとは、

「旧制高校の教育や文化を知り、今後の教育に活かすこと」を目的に、  
市民・学生・研究者が交流する場です。

お申込み・お問い合わせ

旧制高等学校記念館 電話・0263-35-6226 FAX・0263-33-9986 E-mail:kyusei-koko@city.matsumoto.lg.jp

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。